

ふてしこ

7

'21

No.308

巡回通信誌

## コロナ禍の中でのがん医療

副院長 尾崎 邦博

新型コロナウイルスの波が来るたびに、全国各地でがんの治療に支障が出ているとの報道を目にします。理由の一つは病院での感染リスクやコロナ患者さん対応による病床やスタッフ不足が挙げられ、実際、全国の先生方から予定通りに手術ができない期間が生じていることも伺います。幸い当院においては今まで病院側の問題で、がんの治療に支障がでたことはほとんどありませんでした。しかしワクチン接種と手術との時期をずらす必要性から、手術日程を調整することはあり、当院でも医療に多少影響がでることもありました。「多少」ですんでいるのは病院スタッフが一丸となって通常の診療を中止せず、救急も止めないよう様々な工夫と努力した成果だと思えます。がんの治療に支障がでる理由のもう一つは患者さんがご自身の判断で受診を控たり、治療をやめることです。治療が

比較的に待てるがんかどうかは、臓器や病気のタイプで異なります。一概に言えないため常に主治医の先生と相談して決めることが大切です。決してご自身方のみで決めないようお願いいたします。

コロナにより、がんの治療だけでなく、検診や検査を控えておられる方も全国に多くみられます。がんの発見はできる限り早い方がよい。早期発見早期治療は大切です。今、治療を受けられてない方も、可能な範囲で検診や検査を受けて頂きたいと思えます。

通院中や受診時の病院内での感染を心配されている方は多いと思えます。薬の処方のみであれば近医にお願いできるか確認して頂ければよいと思えます。当院を受診される患者さん方にもご協力を頂きながら、院内でできる限りの感染対策を行っておりますので安心して受診して下さい。

